

第13回太平洋学術会議に出席して

米 倉 伸 之 (地理)

表記の会議が本年8月18日～8月29日の二週間、カナダ国ヴァンクーバー市のブリティッシュ・コロンビア大学で開催された。この会議は、太平洋学術協会の主催により、太平洋地域に関連する諸問題の科学的研究における協力推進を目的として、太平洋地域の46ヶ国が正式メンバーとなっている。1920年にホノルルで第1回会議が開催されて以来、戦前に6回、戦後は3～5年おきに開かれている。1966年には東京で本学(本郷)を会場として第11回会議が12部門の分野で約2000名規模で開かれた。1971年の第12回会議(オーストラリア国キャンベラ市)から規模が縮小され、今回の参加者数は約800～1000名規模と聞いている。

今年は、「太平洋地域における人類の未来」を主テーマとし、1. 人口問題、2. 水産資源、3. エネルギー資源、4. 土地資源、5. 食糧資源、6. 科学と科学政策、7. 太平洋地域における人類

の未来の条件の7つのサブテーマでシンポジウムが開かれた。そのほかに、各分野の科学委員会ごとにシンポジウムがもたれた。

2週間の会期のうち、第1日は開会式および会長講演、第2～第5、第8～第9日の平日の午前のはじめに、サブテーマひとつずつをとりあげて基調報告がなされ、ひきつづき、分科会ごとにシンポジウム、一般発表があり、夜は、公開講演、常置委員会の会議などが開かれるという形式で行われた。中間の第6～7日の週末には、ヴァンクーバー周辺への見学旅行が行われた。

筆者は会期前半の第1週だけ参加し、固体地球科学のシンポジウムで発表をし、土地資源のシンポジウム、地理学分科会などにも出席した。今回の会議は、東京大会にくらべ規模が小さくなったためか、やや熱っぽさに欠けていたように感じた。また、会場であるブリティッシュ・コロンビア大学の構内が広

大で、発表会場が分散していたこと、第一週は天候不順で小雨が降りつづいたことなど影響していたのかもしれない。会議は、比較的小人数で手際よく運営されており、発表会場によっては、スライド映写が完全に自動化されて、発表者自身で制御できるようになっており、日本の学会でみるスライド係というような人が会場にいないこともあった。

固体地球科学のシンポジウムは、会議全体のテーマとはかなり独立して、GDP（国際地球ダイナミクス計画）の西太平洋、東太平洋地域の作業グループおよび環太平洋火成活動計画のグループによる討論会だった。第1日の西太平洋地域の報告では、日本人の発表が中心で、GDPの日本列島島弧班の総合報告、海溝に近い地域の地殻変動、海底地震計などについて報告された。

また最近アメリカ合衆国地質調査所で編集された中国大陸を中心とする東アジアの地質構造図（断層や褶曲などの分布図）が紹介され注目された。第2日は、東太平洋地域について、アメリカ・カナダの研究者を中心として発表があった。中南米からの参加者が少なくメキシコの地球物理学者の発表がひとつだけなのは残念だった。第3日は火成活動の年代測定・時代対比に関する報告があり、中央アンデスの深成活動の中心が約1億8千年以前から現在まで、100万年で1km位のほぼ一様なはやさで南米大陸の西端から東へ移動しているという発表などが注目された。第4日は一般発表と総合討論が行われ、海溝

斜面の断層モデル（海溝の陸側斜面には陸側に傾く逆断層が何本も発達しているというモデル）や前述の火山帯の移動などが議論の中心となった。

土地資源のシンポジウムでは、土地利用の生態学的な研究や、衛星写真による土地資源の解析方法の開発など、最近注目をあびている分野からの報告が多かった。またカナダの土地総局の作成した植生・土壌・気候・土地利用などの土地資源に関連した地図類が展示されており、関心を集めていた。

いくつかの分野のシンポジウム、分科会が平行的に開かれており、筆者が主に会議本来のテーマから独立した固体地球科学のシンポジウムに出席していて、全体の動きを充分にはつかんでいないので、本会議が目的としていた「太平洋地域における人類の未来」についてどのような結論あるいは方向づけがなされたかについては充分な見解をのべることができない。

ヴァンクーバー市は、青い海にのぞみ、森林におおわれた山々を背後にした美しい街だと聞いていたが、あいにくの曇天・小雨の一週間で残念だった。週末の小旅行の午後に、やっと太陽と青空に恵まれ、その美しさを垣間見た。ブリティッシュ・コロンビア大学の構内の広さ、芝生と林、近代的な建築と教場の設備の良さは、カナダでも一流とされており、研究・教育に専心するのに、うらやましいほどの環境である。